

## 義務教育と農業高校を接続する農業の学びに関する一考察

笠間聡美 埼玉県立羽生実業高等学校

荒木祐二 埼玉大学教育学部生活創造講座ものづくりと情報・技術分野

キーワード：農業教育、生物育成の技術、栽培学習、生徒理解、系統的な学び

### 1. はじめに

昨今、農業高校へ進学する生徒が多様化し、生徒間にみられる農業に関する知識や体験の差が大きく開きつつある。とりわけ農業への関心が低い、あるいは農業に関心が無い農業高校生の増加は看過できない状況にあり、これには3つの要因が挙げられる。1点目は、専門高校の減少にともなう普通科志向である。1970年まで専門高校への進学率は全体の約40%を占めていたが、その後は減少して2022年には17.4%まで減少している(文部科学省 2022)。そのうち農業高校生はわずか2.4%である。専門高校の数が減ったことや、普通科志向・大学進学希望の高まりなどから、専門高校には多くの希望外入学者が入学するようになった。2点目の要因には、子どもの農業体験の乏しさがある。戦後の都市化や住宅環境の変化、また産業構造の変化により、子どもたちが農業体験や自然体験をする機会が減少している。体験したことのない農業に関心を抱くことは期待できず、農業高校を希望する割合が低下した。そして3点目の要因として、農業高校が単に農業従事者育成を目指す教育機関ではなくなったことが挙げられる。産業構造が変化して農業で収入を得ることが困難になり、農業高校を卒業してすぐに農業へ従事する生徒が減っている。これにともない農業高校の学習内容も多様化が進んでいる。

とりわけ上述の2点目の要因「子どもの農業体験の乏しさ」は深刻で、かつての農業高校の授業は、生徒が農業体験を十分に積んでいることを前提として実施されたが、現在はその前提が崩れて円滑な授業の実施が困難になっている。そこで本研究では、農業に関連する義務教育での学びを把握して、今後の農業高校の授業を義務教育からの連続として系統づけるための方向性を探ることを目的とする。現在、義務教育課程の学習指導要領において、農業に関連する体験的な学びは、主に小学校生活科・理科、中学校技術科に位置づけられている。しかし、その授業時間数が十分でないうえに、学校ごとに畑の有無や肥沃度などに違いがあり、実際の活動内容には学校間で大きな差が認められる(石川ら 2015; 田代・荒木 2022)。本稿ではこれらの課題を再整理したうえで、義務教育の農業の学びと農業高校の学びの接続を図る手立てについて検討する。

### 2. 方法

#### 2-1 中学校技術科における生物育成の学校現場が抱える課題に関する聞き取り

中学校において、農業に関する内容は主に技術・家庭科技術分野(以下、技術科)の「生物育成の技術」(以下、生物育成)で扱われている(文部科学省 2018a; 田口ら 2019)。その教育現場の実情を把握するため、中学校技術科教諭10名(男性8名、女性2名; 20代~60代)に聞き取りを行った。主な質問内容を表1に示す。聞き取りについて録音の許可を得られたものは逐語録を、得ら

れなかったものはメモを作成してKJ法でまとめた。

表1 中学校技術科教諭への質問内容

1) 生物育成の学習頻度、総何時間数（学年、時数、時間外の有無）
2) 生物育成の計画準備・片づけを含めた時間（計画や発注準備、片づけ、レポートまとめ評価など）
3) 他の分野と比較して生物育成に割かれる時間は多いか
4) 生物育成に協力者がいる場合誰か（他教諭、管理職、業務、外部講師、近隣住民など）
5) 生物育成の指導にともなう大変さや苦勞はどのようなものか
6) 生物育成の指導に関して感じている課題や今後望むこと

## 2-2 小学校における栽培学習に関する聞き取り

小学校では、主に生活科と理科、総合的学習の時間や学校行事において、栽培や飼育といった農業の学びが位置づけられている（文部科学省 2018b ; 2018c）。これを踏まえて小学校の実態を理解するために、複数校に勤務経験がある学校教諭4名（40代/女性）に聞き取りを行った。4名の教諭のうち、C教諭は特別支援学級、他3名は普通学級の担任である。聞き取り後、3名については録音から逐語録を、残り1名についてはメモを作成してKJ法でまとめた。質問内容を表2に示す。

表2 小学校教諭への質問内容

1) 栽培学習の学習頻度、総何時間数
2) 栽培学習の実施場所、田畑がある場合その広さや場所
3) 栽培学習で取り組んでいる内容
4) 栽培学習の準備や管理に協力者がいるか、いる場合誰か
5) 栽培学習の指導に関する大変さや難しさ、今後の課題

## 2-3 農業高校生徒の飼育栽培経験などに関する聞き取り

埼玉県の高등학교193校のうち、農業関連高校は8校あり、既述のとおり入学生徒は多様化している。農業高校における農業の学びは、多くの農業科目で成り立っており（表3）、卒業要件のおよそ3分の1を専門の農業科目で修める（文部科学省 2019）。教育課程は学校ごと専攻ごとに異なる

表3 農業科目分野構成（出典：高等学校学習指導要領解説平成30年告示）

分野等		科目
分野共通の科目	基礎的な科目	農業と環境*・農業と情報
	総合的な科目	課題研究*・総合実習
分野	農業生産や農業経営	作物・野菜・果樹・草花・畜産・栽培と環境・飼育と環境・農業経営・農業機械・植物バイオテクノロジー
	食品製造や食品流通	食品製造・食品化学・食品微生物・食品流通
	国土保全や環境創造	森林科学・森林経営・林産物利用・農業土木設計・農業土木施工・水循環・造園計画・造園施工管理・造園植栽・測量
	資源活用や地域振興	生物活用・地域資源活用

\* 農業科における原則履修科目

るため、農業高校の中でも様々な学びが存在する。そこで、農業高校生の農業体験や現在の授業の様子を知るために、栽培・飼育体験の有無や、農業科目の授業などに関する聞き取りを行った。対象は埼玉県内の農業関連高校のH高校3年生13名（男性10名、女性3名；17～18歳）とした。主な質問内容を表4に示す。この聞き取りでは、社会学で社会事象を把握する技法として広く用いられている自由面接（インタビュー）調査の手法を用いた。インタビューの流れを重視し、スムーズに回答が得られるように努めながら、その場でメモを作成して後日にKJ法で回答を分析した。

表4 農業高校生への質問内容

1) 生き物の飼育経験はあるか、あるとしたら何か
2) 植物や野菜などの栽培経験はあるか、あるとしたら何か
3) 生き物や昆虫に対する関心や思い
4) 農業科の授業において好きな内容・嫌いな内容は何か

### 3. 結果と考察

#### 3-1 中学校技術科教員の回答

中学校技術科生物育成は、学習時期は学校ごとに異なるものの、時間数は6時間から12時間しか割り当てられず、技術科全体の時数の中でもわずかであった（表5）。授業実践は、ベランダや技術室の横などでプランター栽培を行う程度であり、屋外の畑などの露地栽培は皆無であった。使用する教材は、葉菜類、小型の根菜、花き類などが主であり、小型の栽培物でないと授業で扱えないことがうかがえた。また、農業高校との授業連携に関する要望を尋ねたところ、過去に実施していたフラワーデザインの出前授業の再開を期待したり、これからの農業問題を一緒に考える授業やドローンの共同実習を実施したいといった声が挙がった。

ここで、生物育成が抱える課題を整理すると、①生物育成に割ける時間数が少ない、②評価が難しい、③生き物の扱いや教材研究が難しい、の3つに大別できた。①生物育成に割ける時間が少ない点に関しては、「ほかの製作に時間を割いているが、全体的に授業時間に余裕がないため生物育成が犠牲になっている」「本当はもっと生物育成をやらなければならないと思いつつも、他の分野に時間がかかるからできない」などの回答が得られた。技術科では、生物育成に加えて「材料

表5 中学校技術科教諭の主な回答

質問項目	主な回答
学習時期	1年生・1年生の2学期・2年生・3年生・1年と3年
時間数	6時間～12時間
場所	ベランダ・技術室の横・技術室前のベランダなど
教材	コマツナ、ミズナ、ルッコラ、ラディッシュ、スプラウト、草花、キク、パンジー
農業高校と連携するなら	農業問題を一緒に考える、出前授業してもらおう、ゲストティーチャー、ドローンの授業・実習をやる

と加工の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の学習内容を指導するが、そもそも総時間数の少なさが大きな課題となっていた。このように学習内容が多すぎるといふ、カリキュラムオーバーロード問題は他の教科でも指摘されている。義務教育課程において、実験や実習が減少しているとしたら、農業への関心が薄れてしまうことが予想されるため、農業高校教諭として危機感を覚えざるを得ない。

②評価が難しい点に関しては、「結果の責任が生徒の栽培方法にとどまらない点が、評価のしづらさにつながっている。例えば、肥料をあげたから大きくなった、でも本当か、となる」「授業外の管理を全てみとれない」などの回答が得られた。すなわち、生物育成では生徒の考えとは別に、そのときの天候で偶然にうまく育った、育たなかったという結果が得られてしまう点を技術科教員は懸念している。「原因があり結果がある」という技術科教育独自の教師視点が認められ、その視点が生徒のパフォーマンスの評価を困難にしていることが推察された。

③生き物の扱いや教材研究が難しい点に関しては、「季節を選ぶ」「育てるだけで精一杯」「教材研究をするにしても、1日や2日でどうにかなるものではない」といった回答があり、教師・生徒ともに多忙な中学校において、生き物を育てることがいかに負担であるかがうかがえた。

また、栽培方法がプランター栽培のみであったことから、「畑などは使わないのか？」という質問も追加した。この質問に対しては、「個人の区画を確保できるほど広いスペースがない」「行くのに時間がかかる」「露地栽培だと何となく育てられてしまうのがかえって問題になる」など否定的な回答がほとんどであった。露地栽培は時間や手間がかかるうえに、栽培物に対する個々の課題設定をすることができないため、露地栽培は行わないのが中学校教育現場の実情である。

以上をまとめると、中学校技術科の生物育成では、簡易で小型の植物を扱い、課題解決を強く意識して栽培していた。この理由として、中学校技術における生物育成の時間がごくわずかであることに加え、技術科教育として課題解決に取り組むことが重視されていることが挙げられる。こうした中学校の現状を踏まえ、中学校での農業の学びと農業高校での学びをつなげるには、技術科教諭から提案された「農業問題を農業高校生と一緒に考える」活動や、「出前授業や実習」などを共同で行う取り組みなどが考えられる。学習時間数の少ない中学校では、効率的かつ負担のない栽培実習が求められており、連続した農業の学びを維持するには、農業高校側からのアプローチに対する期待が大きいことが示唆された。

### 3-2 小学校教諭の回答

回答者の属性と回答の一部を表6に示す。栽培学習の頻度に関する質問には、「学年によって差があり、低学年は時間割に自由が利くため、週1回以上畑に行くことも可能である。逆に高学年では、学習内容の増加により栽培学習をやりにくい状況にある」といった回答が得られた。その理由について、「1・2年生ではサツマイモなどを実際に生活科で“見に行く”活動があるため力を入れるが、それ以降の学年になると優先順位が下がってしまう」と指摘し、学習指導要領で栽培学習の実践が明確に定められていないことが、3年生以降の栽培離れの原因と考えていた。一方、特別支援学級では、自立活動などの授業に位置づけながら、栽培学習に大きく時間を割いていた。小学校での栽培の位置づけに関しては、「例えば、学校をあげて『食育』を実施する学校なら別だが、普通の学校なら栽培は行わない」という回答もあった。小学校における栽培学習は、授業以外に何らかの位置づけがなければ、時間が割かれる可能性は低いという結果となった。

表6 小学校教諭の属性と回答の一部

	担任学年	学校所在地	実践場所	教材	栽培授業数	管理補助者	連携先
A教諭	1年生	郊外	借りている畑	夏野菜、ラッカセイ、サツマイモ	2.5時間以上/週	教頭	無
B教諭	5年生	市街地	教室前か花壇	ハウセンカ、ワタ、ピーマン	1～2時間/年	業務職員	無
C教諭	特別支援学級	市街地	学校の畑	夏野菜、冬野菜	2時間以上/週	無	専門高校
D教諭	1年生	郊外	借りている田畑	アサガオ、パンジー、チューリップ、イネ	2.5時間以上/週	地域ボランティア	農業法人

また、小学校の栽培学習でみられる子どもたちの反応については、「幼少期からの環境次第で、子どもの様子がまるで違う。畑や自然が多い環境で育つと虫もへびも平気」と語られるように、幼い頃からの環境で、虫や動植物への接し方に差があるように見える。加えて、体験の差にはコロナ禍の影響も出ている。別の教諭は、「今年（2022年）はいままでで一番大変かもしれない。今年の子は何をするにも初めてとなることが多い」と、コロナ禍の影響で幼少期の体験不足が顕著にみられると語っていた。この「体験すること」は、子どもにとってどのような意味をもつのだろうか。特別支援学級では、「体験すること」を大切に学習活動に取り入れている。栽培学習時の様子について、教諭は「子どもたちが、作物が出来て嬉しいとか大きくなって嬉しいとか、目に見えて分かる」と語り、栽培活動を通じて達成感や嬉しさが得られる点に着目している。これは、特別支援教育にて子どもの情緒発達を重視していることを背景とした発言といえる。なお、特別支援教育では、これまでどおり栽培後に作物の活用として調理実習を行っている学校もある一方で、コロナ禍の影響で現在は調理実習を行えない学校もみられた。「コロナ禍でも調理実習が出来るかどうかは校長の裁量次第」との回答もあり、調理実習は学校の裁量によって行われ、行えない学校では栽培物を持ち帰っているのが教育現場の実態である。

以上を踏まえ、小学校での農業の学びをサポートするために、農業高校で何ができるか考えたい。C教諭によれば、総合高校（農業系を含む）と連携し、高校から小学校へ出前授業に来てもらっている。出前授業は、その高校から購入した肥料を小学生と高校生とで一緒にまいて土壌を整えるところから始めている。小学生は1人1苗を育て、収穫するまでの栽培を体験する。このように、煩雑な土づくりや苗搬入などを外部の力に頼ることができれば、小学校の栽培学習は安定したものになるだろう。以上から、小学校の栽培学習に対して農業高校が支援できるようになれば、(1)小学校における栽培学習の指導負担が軽減される、(2)小学生に農業にかかわる本質的な学びを提供できる、(3)農業高校生が教える立場になって成長する、といった3つの効果が期待できる。

### 3-3 農業高校生の回答

生き物を飼育した経験がある者が85%、植物を栽培した経験がある者が62%と、飼育や栽培の体験を有する生徒が高い割合で確認できた（表7）。H校は埼玉県の郊外に位置し、周辺には田畑や自然環境が豊富であることや、一軒家に住んでいる生徒が多いことが影響していると考えられる。飼育経験のある生き物は様々であるが、魚類や爬虫類などは、自分で捕ってきたものを飼育していた。また、両親や近い大人が、飼育や栽培、昆虫採取や魚釣りなどを好んでいると回答する高校生もいた。それが生徒自身の生き物への興味につながっていると考えているようである。一

表7 農業高校生の主な回答

質問項目	主な回答
・生き物の飼育経験	経験有り11人；昆虫類（カブトムシ、クワガタ）、魚類（ナマズ、フナ、コイなど）、爬虫類、哺乳類（ネコ、イヌ、セキセイインコ、ウサギ、ハムスター）など
・植物栽培の経験	経験有り8人；観葉植物（パキラ、ゴムノキ）、コメ、野菜（夏野菜、冬野菜、根菜類）、果樹（カキ、ミカン）など
・生き物に対する気持ち	小さい頃は昆虫が好きだったが、やがて嫌いになった（6名）
・好きな授業内容	魚関係（水槽掃除、魚捕り）、イベント参加、地域資源利用の加工実習、販売実習、野菜収穫、養蜂、外来生物調査、薪割り、落ち葉掃き
・嫌いな授業内容	チップづくり（伐採管理）、採蜜、養蜂の内検、稲刈り、販売実習、わら切り、外来生物調査、薪割り

方、昆虫採取経験者の中には、幼少期には昆虫を好きであったが現在は嫌いと回答する者が多く、成長過程で昆虫を嫌いになる様子も認められた。

次に、農業高校の授業に対する生徒の嗜好に目を向けると、好きな授業については「魚をとる授業ではKさんがコイを捕ってすごかった」「魚の授業を、しばらくやってないからもっと増やして欲しい」などと語られ、魚類関連の授業が多く挙げられた。また、薪割り、収穫、料理、イベントなども挙がり、「落ち葉はきが好き。もうそれだけやってればいいから」という意見も出た。一方、嫌いな授業については、「養蜂の採蜜は時間が長引くので嫌だ」「伐採作業のチップパーが嫌い。においが嫌で鼻が痛くなる」「わら切り」などが挙げられ、「販売で売りに行くのが嫌だ。知らない人と話すのが嫌だから」として自身の性格と関連付けて苦手を嫌いと考えた傾向にあった。農業高校の授業は実習が多く、生徒は体験から自分の好みや性格を理解していくことがうかがえる。造園会社へ就職を決めたNさんは、「最初は専門学校行きたかったが、お金がないから就職することになり、生き物や植物が好きで、先生の紹介もあって決めた。工場より植物の方が良いし、造園は池など色々出来るから好き」と自分の進路を説明してくれた。このように農業高校の生徒は、幅広い専門領域に関する様々な実習体験を通じて意思決定していくことが示された。

#### 4. 総合考察

小・中学校教諭への聞き取り調査から、中学校技術科の生物育成では、時間数不足や場所の確保、評価方法や管理技術などの課題が挙げられるとともに、課題解決への取り組みを重視していた。また、小学校の栽培学習では、授業以外に何らかの位置づけがなければ栽培に時間が割かれる可能性は低いこと、コロナ禍の影響で幼少期の体験不足が顕著であること、特別支援学級では栽培学習の情緒発達面もみていること、小学校の実習もコロナ禍の影響を受けていることが明らかになった。子どもたちの体験活動は、近年著しく減少しており、栽培に限らず多くの分野で減少傾向にある。学校教育において子どもたちに栽培活動などの体験機会を与えることは、さらに重要性を増していると考えられる。

また、農業高校生を対象とした聞き取り調査では、実体験を振り返りながら自分の好きな授業について説明していたことが生徒間で共通していた。とくに、飼育・栽培体験は深く印象に残っていた。実習体験にもとづいて説明をしていることから、体験を通じた学びが生徒の自己を形作

り、さらに自己理解や進路決定に寄与している可能性がうかがえる。この結果は、体験を通じて学ぶことの重要性を示唆するものである。そして、体験活動の重要性を理解する農業高校生が、小・中学生に対して農業技術を教える機会を得られれば、農業高校生自身の農業への関心がいっそう高まるとともに、キャリア形成にもつながることが期待される。

以上から、義務教育で体験的に農業を学ぶ機会を確保し、義務教育から高校まで農業の学びを系統づけるためには、小・中学校と農業高校の連携を図ることが有効と考える。連携の方略として、既存の協働的な栽培活動を軸に据えながら、農業高校の生徒の成長を意識した活動へと発展させることが望まれる。農業高校の専門知識や技術を提供できれば、小・中学校での農業の学びの指導負担、とりわけ実習の負担が軽減されるだろう。小・中学校における今後の農業の学びの醸成へ向けて、農業高校側からの歩み寄りに大きな期待が寄せられている。このような協働的な農業の学びを通じて、小・中学生および農業高校生が、農業分野への興味・関心を高めてくれることを期待したい。

ただし、そうした協働的な農業の学びの実現にあたり、小学校生活科、中学校技術科、高校農業科の学習指導要領では、それぞれ掲げている目標が異なる点に留意する必要がある（表8）。小学校生活科では自立して生きていく資質、中学校技術科では社会を構築する資質、高校農業科では職業人としての資質の育成をめざしている。しかし、いずれも具体的な活動や体験を通じた学びを目標に掲げていることから、義務教育と農業高校を接続した学びは「農業体験」を軸に据えた活動の充実を重視してしかるべきと考える。また、農業には多面的要素があり、環境や生態系の保全、地域や伝統文化の活性化、人への癒しや教育の場の提供などは、理科や社会科、国語科などでも取り扱われている。したがって、高校農業科で学ぶ科目は、様々な教科で取り扱われてきた内容の基礎の上に、さらに体験的な学びを重ねることで成り立つものといえる。ただし、座学による学びに対して、農業高校生は農業科とのつながりを感じる事が少ない。この要因には、体験した学び以外は記憶に残りづらいことや、座学では楽しいという印象を抱きにくいことが考えられる。農業高校生が体験したことに対する感情を頼りに、自分の好き嫌いを判断しているからである。こうした農業高校生の特性を理解しながら、農業高校側から小・中学校へアプローチを図ることも、協働的な農業の学びを実現するうえで欠かせない視点となるだろう。

表8 各学校種・教科の目標（出典：文部科学省 2018a；2018b；2019）

小学校 生活科	<u>具体的な活動や体験を通して</u> 、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、 <u>自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u>
中学校 技術科	<u>技術の見方・考え方を働かせ、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を通して</u> 、 <u>技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力を次の通り育成することを目指す。</u>
高校 農業科	農業の見方・考え方を働かせ、 <u>実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して</u> 、 <u>農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</u>

## 5. おわりに

現在の義務教育における体験的な農業の学びは、社会や学校システムの課題、さらにコロナ禍

の影響で極端に減少している。農業体験活動の充実に向けて、教育現場に山積する多くの課題を小・中学校だけで解決することはきわめて難しい。他方、農業高校では生徒たちの農業への関心を高め、キャリア教育へつなげる方略が問われている。以上を踏まえると、義務教育で農業を体験的に学ぶ機会を確保し、その学びを系統づけるためには農業高校側から小・中学校に対して連携を図ることが解決の糸口になると考える。

本稿の調査結果は、限られた回答者から得た質的なインタビュー結果で構成されているため、農業を取り巻く教育の一部を抽出したにすぎない。今後は、各学校種で実践される栽培・飼育活動に関する情報をさらに収集しつつ、より多くの教員から聞き取りを行い、義務教育と農業高校を接続する系統的な農業の学びのあり方に関するより具体的な提案が求められる。

#### 謝辞

アンケート調査に協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。長期研修の機会を与えてくださった埼玉県教育委員会、羽生実業高等学校の先生方に御礼申し上げます。本研究は、科学研究費補助金（22K18615）の助成を受けたものである。

#### 引用文献

石川莉帆・荒木祐二・斎藤亜紗美・田代しほり（2015）埼玉県小学校における植物育成の現状把握と課題の顕在化. 埼玉大学紀要教育学部 64(2): 145-155.

文部科学省（2018a）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編』、167pp. 開隆堂出版.

文部科学省(2018b)『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編』、152pp. 東洋館出版社.

文部科学省(2018c)『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編』、176pp. 東洋館出版社.

文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説農業編』、360pp. 海文堂出版.

文部科学省（2022）「令和4年度学校基本統計（学校基本調査報告書）」

[chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt\\_chousa01-000024177\\_001.pdf](chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf)（最終閲覧：2023年2月6日）

田口浩継ら（編著）（2019）『新しい技術・家庭 技術分野』、275pp. 東京書籍.

田代しほり・荒木祐二（2022）栽培面積と腐植率を指標とした学校園の分類—埼玉県内の小中学校を例に—。埼玉大学紀要教育学部 71(1): 121-132.

(2023年9月30日提出)

(2023年11月7日受理)



# **A Study on Agricultural Learning Connecting Compulsory Education and Agricultural High Schools**

**KASAMA, Satomi**

Hanyu Jitsugyo High School of Agriculture, Saitama Prefecture

**ARAKI, Yuji**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

This study investigates the differences in knowledge and experiences among students enrolled in agriculture programs at agricultural high schools. These differences likely stem from varying levels of exposure to agriculture and the natural world. The study seeks to gain insights into the current state of agricultural education in compulsory schooling and the perspectives of agricultural high school students. Interviews with technology education teachers from junior high and elementary schools revealed several challenges, including constraints in terms of class hours and suitable locations, evaluation difficulties, and issues related to plant management. Additionally, interviews with agricultural high school students highlighted their experiences, encompassing cultivation practices and class preferences. These encounters underline the importance of hands-on training and exposure on students' values and preferences. Looking ahead, a more comprehensive exploration of the state of agricultural education is imperative. Furthermore, it is crucial for agricultural high schools to actively participate in compulsory agricultural education as a form of external support. Such engagement could help bridge the gap in agricultural learning and offer a more holistic educational journey for the students.

**Keywords** : agricultural education, technology of nurturing living things, cultivation learning, students' understanding, student understanding, systematic learning